

善玉菌で養殖ウナギ登り

病気に強く 抗生物質不要に？

善玉菌を与えたウナギは健康で長生きになり、増産に役立つ。こんな研究の実用化に宮崎大学農学部の前田昌調教授（水圏微生物学）が取り組んでいる。前田教授によると「病気に強ければ、治療用に抗生物質を使わない無投薬養殖が可能になる」。食の安全に対する消費者の関心の高まりに応える試みともいえそうだ。

31日から東京で始まる日本水産学会で発表する。

善玉菌は、海藻の表面や魚類の腸内などにいるアルテロモナスという菌の一種。前田教授は「EKZ12」と名付けた。培養して餌に混ぜて使う。生後約5カ月のウナギを2万匹ずつ入れた水槽を用意し、一方にはEKZ12培養液を1割混ぜた餌を1日30分ずつ50日間与え、もう一方には同じ間、普通の配合飼料

宮崎大・前田教授、実用化へ実験

を1日30分ずつ与えて、効果を調べた。

配合飼料だけを与えた水槽では約3500匹のウナギ（17・5％）が死んだが、培養液入りの餌を与えた水槽では約500匹（2・5％）しか死ななかつた。善玉菌がウナギの腸にすみ着き、病原菌の働きを抑えたとみられる。ほかの種類の善玉菌を使った実験ではヒラメなどにも効果があつたという。実験には宮崎県水産試験場などの協力

を得た。

市場調査会社などによると、食の安全への関心の高まりから、ブリなどの養殖では抗菌・抗生剤の使用が減り、病気にかかりにくくするためのワクチン注射の導入が進んでいる。

東京海洋大学の浜崎浩

幸助教授（水産増殖学）

は「原理的にはエビなどで成功例があるが、国内では実用化には至っておらず、軌道に乗るか注目している」と話している。